

関 啓子 著

「話せない」と言えるまで一言語聴覚士を襲った高次脳機能障害
辻下守弘（甲南女子大学教授・看護リハビリテーション学部理学療法学科）

医療者プロフェッショナルの到達点は、患者の立場を真に理解して治療やケアが行えることであろう。医療者の立場として、疾患の病態は説明できるが、病気や障害のつらさを語ることは難しい。それを補う唯一の方法は、患者側の立場となった人々の体験談から真摯に学ぶことである。

まさにプロフェッショナルを目指す医療者にとって待ち望んだ絶好の本が出版された。本書は、言語聴覚士である著者が脳卒中となって倒れ、その後片麻痺を克服して復職し、さらに新しい人生を獲得されるまでの物語がつづられている。ただし、本書は体験に基づいた体験記という範疇を超えて、高次脳機能障害のテキストであるとともに、自ら被験者となって取り組まれた臨床研究をまとめた学術書でもある。

本書は脳卒中の発症を起点として時系列に、「運命の日」「急性期」「回復期」「復職準備期」、そして「復職期」の5章構成となっており、各章とも著者の実直で手抜きを許さない人柄を表すように身体の状態や日常のエピソードなどが繊細なタッチで語られている。大きな特徴は、単に著者の記述だけでなく、治療やケアにかかわった医師や看護師、そしてPT、OT、STといったスタッフ自身が検査や評価の所見、あるいは治療やケアの状況などを記述し、それに対して著者がコメントするといった執筆スタイルがとられていることである。このスタイルに沿って読み進めていくことにより、障害像と回復の状況が明確となり、まさにその現場にいるかのような臨場感を与えている。また、この著者のコメントには、スタッフに対する患者としての感謝や尊敬、そして時には教育者としての厳しい指摘や提言などが散りばめられており、著者の人柄やスタッフとの間柄を感じられて面白い。

著者は、高次脳機能障害に関する一流の研究者であり、専門領域である無視あるいは言語障害に関する検査方法の解説と検査結果の解釈は見事であり、歯切れのいい論理展開とテンポある文章表現はさすがである。また、科学者としての客観的な切り口と患者としての主観的な切り口が交互に語られることで、病態の本質が明確となっている。ただし、言語障害の解説には難解な用語や表現もあるが、医学書院のホームページ内には著者自身の音声データが掲載されており、それを再生すれば障害像の理解を助けてくれる。さらに、このホームページ内には、歩行の状態や手の作業療法場面の画像データ、そして「脳の回復過程を脳波で観る」と「左上肢へのリハビリテーション記録：回復への挑戦—認知運動療法」と題する補足資料が閲覧可能となっているのもありがたい。

著者のリハビリテーション過程は、常に家族をはじめ数多くの知人や友人、そして同僚や教え子らとの関係性に恵まれていた。人が窮地に陥ったとき、人を支えるのは人とのネットワークだということを、本書を読んでしみじみと実感することができた。ぜひ、多くの医療者やケアスタッフ、そしてプロフェッショナルを目指す学生の皆さんに読んでいただきたい。また、本書には、各時期の生活場面における不自由に対する自助具の創意工夫や目的に応じたトレーニングのアイデア、そして認知運動療法、CI（強制拘束）療法、ミラーセラピー、tDCS（経頭蓋直流刺激）療法、そして気功治療などの体験記なども詳細に解説されており、広く一般の方々にも参考となる一冊である。

（A5 頁 256 2013 年 定価 2,625 円（本体 2,500 円＋税 5%）[ISBN978-4-260-01515-8]医学書院刊）